

はじめに

この市民学習会は、5月に行つた学習会「検証レポート」の大震災！その時市民は…？」の、2回目として昨年11月4日に開催致しました。震災から7ヶ月過ぎ、市民と行政の新たな動きをレポートしていただき、1回目の、東の地域からの発表を受けて、今回は主に西の地域からお話をうかがいましたが、市民のレポーター、行政からのレポーター、お話を噛み合つて一段と実践的でおもしろく、また有益でありました。

振り返れば、協働サロンを拠点に初めは実行委員会のメンバーやスタッフの顔合わせから始まって、1年目は連続講座「まちに出て見つけよう、私の大事なもの」（4回・09年度）、2年目は連続講座「まちに出て見つけよう、きずなをつむぐ人たち」（4回・10年度）を前年度の記録をまとめながらの実施は、大変ではあるが好評にも支えられて充実した年になりました。11年度はそれらの経験を踏まえて、サロンから外に出ての地域やテーマ別の活動をしている市民グループとの連携はどうだろうなどと話をしていた矢先の3・11の大地震、これは私たちの学習計画にも大きな影響を及ぼしました。

この大震災を武蔵野市（行政・市民・関係諸団体など）では、どう受け止めたのか：を緊急のテーマに「検証レポート」として、第1回「大震災！その時市民は…？」を5月、第2回「大震災！その後の市民は？」を11月に行い、現在はこの記録誌の作成に取り組みつつ第3回「大震災！いま新しいまちづくり」（2月9・10日）を準備しております。

緊急であつたにもかかわらず、第1回、第2回の学習会の成功によつて「防災」「住民自治」「協働」「市民まちづくり活動」などを「学習」がつないで役に立ち、前進する要の役に立つたことを実感しております。また、実際に起こつた災害への対応、やがて来ると言われる災害への具体的対策などについて、各レポートから地域と庁内の動きを共有でき、相互信頼をすすめられたと考えております。

市民協働推進課による「市民学習」の条件整備、協働サロン・その場と機能の存在があつてこそその学習活動でした。行政・市民が一緒に取り組みによる双方向性の学び合い、気づき合いの前進が認められ、双方が平らな関係を結ぶときにはお互いの学び合いができる、そのような学びが協働を充実させる、そのことを実感させていただきました。

「地域の力」を積み上げていくうえでも、協働をすすめる上でも「多様な学び合い」という視点・環境の整備が欠かせない重要なものであること、その一端をこの3年間の実践で確認し、提示できたかと思います。市民がこのまちの主人公として活動する中で、つながりを増やしながら実力をつけるためにも、参加する人を増やすためにも、今後の行政による学びの環境づくりに大きな期待をしております。

私たちも学んだことをこれからのもちづくり活動や、行政とご一緒の場面にも活かしていきたいと思います。お忙しい中をレポーターの方々、ご参加の皆さま、本当にありがとうございました。

一巡目



境南コミセン自主防災

渋谷 祐一さん

Dの講習も受けています。訓練だけですと最初は良いんですが段々マンネリ化して参加者も少なくなるので訓練の後、昭和記念公園でバーベキューをしたり、池袋に行つた時は温泉に行つたりして慰労を兼ねた懇親会も行っています。防災防災と言つていると堅苦しくなつて人が少なくなるので工夫をしています。今年はどこに行こうかと考えているところです。

日本で大きな災害があつたときコミセンだけでは限度がありますので実際に被災地に行かれた消防署員にコミセンに来ていていただいて講演会も毎年開いています。

南コミセンの防災に関わったのは、平成16年に市役所が防災広場と防災倉庫を作つた時からです。まずはその維持管理についてお話をさせていただきます。境南コミセンは、自営消防と自主防災の組織になつております。境南コミセンの運営委員は5年交代で1年間に1／3は新人に交代されます。それでも多くの方が1年でもいいので体験をされて裝備も実際に動かしてもいりますので良かったと思つています。

コミセンに成人活動部がありまして日赤にお願いして三角巾とかAEDの訓練も行つております。防災公園には装備が沢山あつて可搬式消防ポンプ、飲料水エンジン、夜間照明、炊き出し窯セツト、救助工具、かまどやトイレなどその他いろいろあります。

皆さんにやつてみなさいといつてもなかなかできないと思います。

防災組織は3年交代ではなく特別員といつて自分で辞めたいと言わない限り続けられます。私は7年間続けております。

毎年境南小学校の防災宿泊訓練、日赤短大で毎月行つている訓練、市役所、消防署の訓練にも参加しております。4月に新人も入りますので、立川池袋防災センターの訓練に毎年参加してA E

防災・防犯の会

阪神淡路大震災の時に自分のまちがあのような被害にあつたらどうするのかということで、平成7年に近くの方が集まつて22名で防災・防犯の会を作りました。23年現在会員が137名でいろいろな訓練や会に参加しています。また隣近所のきずなが大事だと言う事で、防災の充実を図るためにバールとかのこぎり、防災食品や三角巾も各戸に配布しています。今年度は防災リュックを

全員に配布しました。その中に準備しておいたためのグッズを載せた冊子入れを入れました。会費が年500円ですので毎年配る訳にはいきませんので2年に1回配布しています。

自主防災の関わりは、現役の頃消防署で現役ボランティアを募集していると言う事で勉強に行くように会から言われ平成8年から消防ボランティアに入つて訓練をしています。現在は中学3年生の全員に卒業前にAED心肺蘇生を教えています。また、小学校の先生やPTA、父兄にもAEDと三角巾の使い方を教えていきます。多い月はボランティアだけで1週間家を空けて学校通いをしています。やはり訓練をして得たものは役に立ちますので自助・共助・減災となり我が家が非常時に必要なものが見えてくるんじやないかと思つて頑張つております。欲張らずに非常用品を用意しましようと思つて皆さんに言つています。完全に対処するの難しいです、どんな災害が来るか分かりません、通勤時間帯に災害があるかもしれません、夜中かもしれません、そういう時にどうしたらいいのかを皆さんと話し合おうと思つています。境南4丁目の防災・防犯の会の16年目の総会を今月開きますので東日本震災や大きな災害の時にどうするかを、また30年内に震度7クラスの地震が必ず来ると聞いていますので、そういうことに対して皆さんのが関心を持つてもらえるように頑張つているという現状です。

今回東京都が9月29日小金井公園で、小平、西東京、武藏野、小金井で合同で、消防・警察・自衛隊が訓練を行いましたが、医療班で訓練に参加しました。いろいろ申し上げましたが、無関心が一番被害者になると言うことをそこで聞きました。皆さんに意識を持つてもらえるか、どうやってリードしていくかを考えて

いるところです。



大野田地域防災の会

寺島 芙美子さん

大 野田地域防災の会は昨年の1月に発足し、2年目に入るところです。比較的新しい組織ですが、発足までに3年の準備期間があり、ゆっくり丁寧に準備をしてまいりました。防災に取り組むきっかけは、私はけやきユニティセンターの運営委員をやつておりますが、けやきユニティセンターが20周年を迎える頃、けやきはどう進むべきなのか、どうあつたらいいのかという話になりました。その時、ユニティセンターが地域に広めたいよねとか、今までけやきに来なかつた人をどうやつてつないでいこうかとか、地域と疎遠になつてているマンショングの方達とどうやつてつなぎをつけようかとの問題もあるよね、と話し合つていきました。けやきは運営も活動も活発にしているのだから、これからは地域のコーディネーター役として何とかできないうかという話になりました。それはいつたいなんだらうねと言うことになり、私たちはずつと人と人をつなぐことをやつてしまつたし、仲良しも一杯増えてきました。近所で挨拶する方も増えた、コミュニティにとつてそういうのはとつても大切だよね、それに役立つのは何だろうということになりました、それは防災

だよねということになり、防災に取り組むことになりました。

けやきは人と人をつなぐことをメインにしよう、絶対に中心になるのはやめようと言つていきましたが、いつの間にか中心になつていて苦労をしていきます。その当時けやきのメンバー7～8名が私達もお手伝いをすると言つて下さって、強力なメンバーとして現在中心で頑張つていただいています。

丁度その頃「大野田福祉の会」から防災をやらないかとのお話しがありましたので、ではご一緒にしましようということになりました。大野田地域には緑町コミニセんもありますので、出来たら一緒にやりたいとの思いもありましたので、緑町コミニセん、福祉の会、けやきコミニセんと3つの大きな組織が手をつなぎまして「防災を考える会」を立ち上げました。

その中ではバス研修をしたり、タウンウォーキングをして仲間と仲良くなりました。話し合いも何回も重ねるうちに段々と盛り上がり昨年の1月「大野田地域防災の会」として正式に発足しました。

立ち上げのための要因を考えてみますと、

第1点目は、大野田地域の3つの大きな組織が手をつなぐことが出来たことにより、人の輪も広がり横のつながりもでき、協力者も増えたことです。イベントをしても参加者も沢山来て下さいまし、本当にメリットのあることでした。広報は私たちにはまだ手段がなかつたので福祉の会の広報誌に便乗させていただいたりしました。

また、資金の全然ないなか、コミニセんのネットワーク事業費や、福祉の会から支援金をいただき、それが活動の基礎になつたと思ひます。現在でも3つの組織（大野田福祉の会、緑町コミニセん、

けやきコミニセん）から支援金をいただいています。そして100名以上のメンバーに会のお知らせを配っています。

第2点目は、準備会で私たちは何度も話し合いを重ねましたが、ほとんどの会合に当時の防災部長さんと職員の方が参加して下さって、アドバイスや背中を押してくださったことが非常に大きになりました。どうしても防災は男性の社会と言う気もするんです。女性の私が防災の会の代表になつて心細かったのですが皆様のご協力で何とかやつております。役員会の後は、飲みに行く機会もありお酒も結構強くなりました。

私たちは昨年に第一歩を踏み出したわけですけれど、これまで防災訓練とかシユミレーション訓練、自己啓発の勉強会にも参加して勉強していたところ、3月11日の東北地方を襲つた大地震がおきました。なお一層私たちが避難所の運営を強力にしなくてはいけないという気持ちになりました。そして、より一層防災の意識が高まり人のつながり、きずなの重要性がクローズアップされました。

防災の会では東北地方で被災された2名の方から生の声を聞く機会がありまして、本当に大変だったんだなと思いました。一人の方の親御さんがけやきコミニセんの運営委員をされていました。会社は流されて家も住めない状況でこちらに出てこられ、住む所もなく大変な思いをされていたのですが、けやきの運営委員が『僕の家を使っていいよ』ということがあり、いまその家にお住まいです。運営委員の方が地域に出てつながりがなかつたら情報も入らないし、コミュニケーションがとれていて信頼関係があったので、こういうふうに良い結果になつたのではないかと私は思っています。

3月11日以来私たちも宿泊体験をしましようと話しをしていました。ちょうど「大野田福祉の会」にまち全体にゆるやかな、緊密なつながりをつくることを目指している、アクションプランというプロジェクトチームがあり、このチームに私も入っています。そこで、コラボして防災に対し「福祉の会」はソフト面、「防災の会」はハード面、丁度両面で良い内容のものが出来るのではなかかということで、初めての共催事業をいたしました。それが10月1・2日に行われました。

第一部は地域団体交流会を行い、地域全体にゆるやかなつながりを作りだしていくきっかけを作ろうと計画をしました。

内容としましては地域で活躍している多くの団体に呼び掛け、交流会をもち情報交換をしましたが、時間があつという間に過ぎました。行政をはじめとして小中学校、マンション、集合住宅自治会、コミセン、町内会など44名31団体の参加がありました。特に地域では見えていない集合住宅の呼び掛けに力を入れました。本当に集合住宅については数が多いので20世帯以上の比較的大きな集合住宅の50棟をピックアップして担当の方がお誘いしました。大変な作業でしたが、この内7団体の参加がありました。けやきコミセンのチラシなどを配っていると、入れてほしくないというマンションがある中で、マンション関係の方たちが7団体参加して下さったと言うことは本当に素晴らしいことだと思っております。自己紹介をしながら情報の共有をしました。時間が足りなくて残念でしたけれども、初めの一歩としてのきっかけづくりになつたと思います。今後も継続して話し合いをもち、災害だけではなくて広く住みよいまちづくりを考えていけたらいいなと思います。

第二部は防災体験と防災ツアーレをしました。参加者が100名以上ありました。

防災ツアーレは、交流会が終わってから防災井戸、防災倉庫・トイレを見ていただこうと計画しました。最近大野田小学校では12基の防災トイレが出来ましたのでこれからはその組み立ても勉強していきたいと思っています。防災体験としては煙体験、AED、第五分団の放水がありまして子ども達は消防自動車に乗れたことをすごく喜んでいました。

第三部は宿泊訓練をしました。親子も含め65名参加しました。これについてはチラシに細かい持ち物は一切書かずに細かい指示はしませんでした。皆さんで避難所に行くときにいろいろ考えて、どういう道を通ろうか、何を持って行こうかなどを考えて頂きました。行政をはじめとして小中学校、マンション、集合住宅自治会、コミセン、町内会など44名31団体の参加がありました。皆さんと意見交換をしました。沢山アンケートもいただきましたので、それを今後役立てたいと思います。アンケートには「一晩でも床の硬さや冷たさは思つた以上だった。でも、被災した人たちはこんなところに寝て辛かつたろう」とアンケートに書かれていました。皆さん被災地に想いを馳せて眠りにつかれたんだろうと思いました。

今回の活動についても小学校の協力は大きかったです。もちろん市の防災課の方にも多大な協力をいただきました。宿泊については一人でも多くの方に泊つてほしかったと思っています。第一部二部とも初めてのイベントでしたが、まずまずの第一歩となりました。内容を少し欲張り過ぎましたので準備も大変でしたが、みんなで防災を含めてこのまちを良くしようという気持ちがあれば大野田地域は素晴らしいまちになると確信しています。



桜堤コミセン

笹野 章嘉さん

桜

堤 コミセン 地域を中心とした新しい動きを少しお話しができればと思っています。

3月11日の大震災を受けて桜堤地域でも被災された方々や、原子力発電所の事故によつて被災された方や移動しなければならない方たちがおられます事については、非常に大きな関心をもつておられました。また自分たちに何ができるのか、何をしなければならないのかという関心は非常に強くなつてきて、皆さん何とかしなくてはならないと言う思いが共通の思いであるということを実感しております。

一方で初動の3日間と言うのは、行政が迅速に対応するにしてもなかなか手が回らない部分もあり、やはり地域の安心安全は自助・共助という形で地域に委ねられているのではないかと感じます。

では、何ができるのかといいますと、地域の中には非常に複雑な人間関係なども考慮すると、常時人々に目をかけると言うことをしようとしても、十分とは言えず、また地域で支援を期待される個々の団体においてもそれぞれの特性が異なることから単独ではなかなか対応ができない。または限られた内容になるのは否めないというのが現実です。また、その団体には団体独自の個別の目的がありますから災害とか防災に全力を投入することも困難だ

ということも現状です。

例えばよく言われるのですが、コミセンは地域の中心でありますた、防災無線も備えていることから拠点となることが期待されますが、運営委員さん、桜堤コミセンの場合31名おられますけれど、それだけで支援を行える範囲は極めて限られています。また、避難所の設備や器具などもないことから実際の受け入れは困難です。

一方地域社協（福祉の会）や、民生委員の方は要介護の方々の人的なリストを持つていましても、普段は個人情報と言うことで秘匿されているのが現状です。

一方で活動されている我々の所でも自主防災組織や消防団は救命器具や人的な行動をともなうことができますが、地域の支援を要請されている人々のリストがないため、効果的な救援が行いにくいという課題があります。

もちろん限られた地域において活動されていることから普段からの目配りやある程度の人に関する情報は個人的には確認されています。しかしながら地域全部ではなく、また広い地域においてどのように情報を把握するかというのはそれらの団体の一番の弱点であると言うのが実情です。その限られた地域の活動であることが、周辺の状況の把握のためには最も必要であることもあります。そしていざとなつた時には弱者とみられる子どもさんや年配者に対する保護のためには普段から保有している各団体からの情報は活動のためにはきわめて重要な資源となることがあります。個人情報と言う縛りのために普段から知ることはできません。しかしながら災害という時には個人情報を盾に秘匿するなら何のためのリストかということになります。災

害時の活用については純粹にその人のために活用することであり、そのような活用こそが本来のリストも目的でもあります。誤解している方が多いようなのでこの点については行政の方に改めて確認をしておきたいと思つております。

また、地域社協（福祉の会）などは災害時の安否確認を担当されていると伺つております。しかしながら安全である時の報告は、災害時極めて有用な情報となります。そうではなく実際に災害にあつた場合に現場に立ち会つた人がどのような行動をとるべきかについては明確ではなく、またその方が直ちに救出や援護ができるないという現実もあります。初動の範囲で考えた時には被災した場合の一時的な保護については専門的な知識のある設備や場所のある方の協力がやはり必要だと思います。

それでも何とかしなければいけないんじやないかという思いは皆さんに強くあることから、またコミセンが地域の中で比較的心に位置し、建物が活動の拠点になりうるということは明らかです。避難所待機所としてではなく初動の活動拠点として使われるること、及び活動可能な団体、支援要請を期待される情報を有する団体に拠点として活動の場を提供することは可能というふうに思つております。

このため去る10月25日、コミセンと地域社協の共同の呼びかけで15団体の方と地域の防災に対する初動時の取り組みについて第1回目の勉強会を開催いたしました。

15団体の内訳は桜堤コムセン、桜野地域社協、3丁目の自主防災組織、防犯協会、武藏野市消防団第九分団、青少協の桜野地区協議会、浄水北親睦会、新町町会、民生児童委員、防災推進員、日赤奉仕団、桜堤ケアハウス、小学校のPTA、老人会、桜園な

どと広範囲に及んでおります。このうち桜堤ケアハウスと民生児童委員と防災推進委員は今回都合があり参加されませんでしたが、12の団体の方が参加され、団体代表の方々の相互確認ができました。それぞれの団体がどのような取り組みをしているのかもお聞きしました。

このうち地域の養護老人ホームの方からは、緊急時には年配者の受け入れを考えたいという申し出がありました。これも一つの成果だと考えています。実際に被災した場合、また何かあつた時にどこまでの事が出来るかということについては未知数です。しかししながら地域にこれだけの方がいらっしゃるということを知るだけでも、またその団体が何かあつた時には、コミセンで情報交換をして対処する方法があることを確認したことは大きな一步であるという事が出来ると思います。

なお、次回は12月の中頃を予定していますが、次は何が出来て何が困難なのかを明らかにしていきたいと思います。障害になつていることはどのようなことであるのかを明らかにしていきたいと思っています。

その中には行政に対する要望も当然含まれると予想していますことから、オブザーバーとしてここにおられる方にも参加していただきたいと考えております。その中には全ての方が参加されなくては、またある程度継続して何かあつた時はまずコミセンに集まるとの共通の理解があれば地域の安心安全をお互いに確認し合うことができるのでないかと考えております。自助、共助のための人々の仕組みが少なくとも一歩として仕組みが出来上がつてくると考えております。このような形を考えましたのも一昨年のこのような学習会で実行委員である安藤さんがお話しになられた地

域にとつての大事なもの、つながりということが地域にとつても非常に重要な事だというふうに強く感じております。



防災課長

西川 和延さん

今回のテーマは、「大震災、その後の市民は・・・」ということです。前回、 笹井防災部長から、3・11の震災時の武藏野市の状況についてお話をさせて頂いているので、その後の市の対応と市民の方との協働事業についてご説明します。

1. 市民の皆さんの活動

3月11日の地震のあと、防災課にもご要望や要請等が多数あり、いろいろな所で防災課職員も市民の皆さんと一緒に勉強させていただいているます。

本年度になり、市の防災のこと、避難所の運営のことなどの話を聞かせて欲しいということが、この半年で記録に残っているもので40回ほど、その他記録に残すほどでもない小さなことも含めると、防災課職員が市民の皆さんのもとへ出向いて話させていただく機会が相当数ありました。それだけ、市民の皆さんが防災に強い関心をもつているということで、私どもはこの2回の学習会をとらえて、さらに防災啓発を進めていきたいと考えています。

その中で、先ほど寺島さんからもお話をがありました、地域の方で主催された比較的大規模な訓練や宿泊体験等がかなり行われています。例えば、7／23境南小、8／27第五小、9／11千川小、10／1大野田小で開催され、台風のため中止になりましたが9／3第一小でも予定していました。また、井の頭小では、以前から宿泊体験をしているなど、かなりの市内小学校で防災体験をしていただいています。

2. むさしの防災・安全メールのサービス開始

3・11の地震の際の市民への広報という点で、防災行政無線の聞き取り状況が悪いということで、その後広報方法の検討を加え、この7月から防災安全メールのサービスを開始しました。本日チラシをお配りしましたが、パソコンや携帯電話に電子メールで災害情報を配信しているもので、ぜひご活用いただきたいと思います。防災安全メールの配信時間については、現在平日の勤務時間中となっていますが、今後さらに研究が必要と考えています。

また、チラシの裏面にあるように、災害が起こった時にはむさしの FM 78・2MHz に合わせてもらうと、防災課とFMが連携しているので、地元の身近な情報についてはNHKよりむさしのFMをお聞きください。

情報提供については、これに限らずコミセン等を使わせていただき、掲示板による情報伝達などの方法を組み合わせて、皆様に正しく的確な情報提供をしていきます。

3. 初動地域防災訓練（東京都4市合同総合防災訓練）の実施

10月29日(土)に、小金井公園をメイン会場に、東京都と武蔵野市・小平市・西東京市・小金井市の1都4市が合同で総合防災訓練を実施しました。

その前段として、19校で初動地域防災訓練を実施し、小金井公園へ広域避難するという形で行いました。市民約1,200名の参加があり、全体では約15,000名の参加ということでした。今回の訓練は、自助・共助の部分にターゲットを絞り、各機関と市民との連携というテーマをもつて訓練を実施しました。多数のご参加、ありがとうございました。防災への関心の高さを再認識しました。この関心の高さを、さらに市の防災体制の充実につなげていきたいと思います。

4. 武蔵野市地域防災計画の見直し

地域防災計画については、現在見直しに着手しています。見直しのポイントとしては、次の7点です。

- ①的確な情報伝達手段の確保：重要な課題として研究・検討して皆様により良い情報を伝えたい。
- ②帰宅困難者支援の充実：これについては新聞等でご存知のように、東京都も従前の方針を若干変更して、無理して帰宅をしないという方向での、帰宅困難者の発生を抑制するという方法へシフトしている。
- ③家屋・建築物の耐震化の促進と家具転倒防止の推進：自助として皆様にやつていただきたい。
- ④災害時要援護者支援事業の見直し・拡充：共助として地域の皆様の協力を頂き、実施。
- ⑤高層住宅の震災対策の推進：市内にも100mを超える建物が

できた。実際、上の階はエレベーターがないと生活できない。地震があれば、エレベーターが止まるという認識で、今まで以上の備蓄等の自助努力を進めてほしいという啓発をしていく。

⑥放射能災害に対する対応：環境政策課で放射線量測定等をして

いるが、地域防災計画にも対応を記載する。
⑦地域住民の協力による防災力の向上：地域防災力の向上が被害の軽減につながると考えている。

5. 自助・共助・公助に加えて、「近助」の精神

先日講演会で山村武彦氏（防災システム研究所所長）が話していました。

自助は、3日分の水や食料備蓄と家具転倒防止等ということ、これがないと次の避難所にもつながらないので、まず自らの身の安全は自らで守るというのが大原則。

共助は、要救助者の救出、要援護者の支援、避難所の運営等を地域の皆さん之力で実施していただきたい。地域の協力関係ができないと、避難所生活もままならないと思うので、できるだけ共助をふくらませていきたい。市民の皆さんに出来る限りの防災体制の確立をお願いしていきたい。

公助としては、我々行政が、情報手段の確立、避難所や備蓄品の整備、防災の啓発等という形で行う。

「近助」というのは、昔から言われる「向こう三軒両隣り」ということで、共助だと若干範囲が広い。個人情報についても地域が広くなると守る方向が強くなるが、隣り近所であればある程度の個人情報をご存知の部分が多い。ただ、最近集合住宅が多く、隣に誰が住んでいるのかわからないこともある。本市では、

7割くらいが集合住宅と言われる難しい中ではあるが、東京都知事が『防災隣組』と言っている考え方です。共助より狭い範囲の「近助」の考え方をお伝えしながら、市民生活とそれにつながる災害時の市民の安全・安心の確保を、市民の皆さんと手を携えながらやつていきたいと思いますので、さらなるご協力をお願ひいたします。



生活福祉課長

鎌田 浩康さん

んには、生活福祉課の鎌田と申します。いつも地域で福祉の推進にご尽力頂いている方が沢山いらっしゃいます。まずはお礼を申し上げます。

生活福祉課は、基本的には、生活保護をやっているところです。他に地域福祉もこちらでやっています。民生児童委員、赤十字奉仕団、保護司会の事務局もやっている部署です。

生活福祉課では平成19年から「災害時要援護者対策事業」として災害時に何らかの支援を必要としている方への安否確認を行う事業をしていますが、その担当をしているということで今日は呼ばれたのかと思います。

事前にご依頼がありましたので、今日は大きく2つの観点で、お話しします。

一つ目は、市の体制や対応がこの震災でどう変わつていったかという観点。それから市民との関係をどう考えていくかの観点で現状とか考え方について少しお話します。

先ず、市の体制、対応ですが、特に災害時の要援護者対策事業につきましては、実際の地震が起きた場合、どういう決めごとをして、どう動かなければいけないかという事を色々想定したり、考え直したりしないといけないことが、まだまだ沢山あることがわかりました。

災害時要援護者対策事業は、震度6弱で発動するとなつていつたのですが、今回震度5弱で、発動要件ではないが、それでも支援者の方、地域社協の方があの人心配だな、ということで見に行つてしまつたりしました。そんな時にどういう連絡をとりましようかということは考えられていました。6弱でなければ良いとということにはなりません。今回微妙な震度でしたが、こういった場合どういう取り決めをすればよいかについて、個別に又地域ごとに考え方方が違うかもしれない。そういう事も考えていかなければいけない。

また、電話が繋がらなかつたということで、どのような方法でそれぞれが連絡や報告をとりあうか。基本的なことですが大きな問題だと痛感しました。今後市民社協や地域社協の皆さんと一緒に考えながら進めていきたいと思っています。

災害時要援護者対策の安否確認事業を、福祉の方で取り組んだのは、安否確認事業を地域にお願いすることで、地域の見守りとか、近所付き合いがひろがるのではないか、という、ひとつツールとして使つていただければよいのではないかと考えて地域にお願いしました。

このように、先行してこちらの事業を地域にお願いした経過がありました。全体像がなかなか示せなかつたということで、昨年11月から健康福祉部と防災部門と一緒に府内での災害時要援護者対策推進会議を設けて、モデルケースを検討していくところです。

その最中に3・11があり、いろいろ経験しましたので、それを生かして早くモデルケースを作つて地域の皆さんに示していただきたいと思つています。一部示せる状態になつてきましたので、それを地域のみなさんと考えていきたいという状況です。

武藏野の地域が狭いといつてもそれぞれの社会資源が違うので、個別に使えるものと使えないものが変わつてくるので、モデルケースをたたき台にして地域ごとにさらにブラッシュアップしていくかたいと考へています。

先ほど、西川課長から地域防災計画の見直しを進めているという話がありました。この会議でた課題を地域と一緒に考えながら、地域防災計画の見直しにも反映させないと考へています。

私としては最終的には一人ひとりの要援護者の方の支援、避難プランをきちんと作つていければと、それは地域も勿論ですしサービス提供事業者を含めて、作つていかないと考へています。

大きく二つ目は市民との関係をどう深めていくか。昨年、市民社協、福祉公社の事務所移転に関しては、色々なご意見を頂きました。内部コミュニケーション、外部コミュニケーション、どちらも足りなかつたと反省しています。いろいろ地域の実情を聞きながら進めていかなければなりません。

今年、健康福祉総合計画の策定をしておりますが、地域の課題を話し合いたいということで地域懇談会を地域社協の皆さんに呼び

掛けたところ、大野田福祉の会、四小地区福祉の会から了解をいただきました。そこで3回シリーズで地域課題を考え、どんな地域にしたいのか地域懇談会をしました。この経験が大変為になりました、こういう形で信頼あるいはコミュニケーションを深めていくかと思いました。このように関係を深めてお話をすすめることが出来ればと思つています。

市民社協が活動計画をこの秋から策定委員会を設置してその中で各地域社協の方と地域懇談会をやつて生活課題の色々な話していきたいとなりました。これに行政も参加をしながらすすめたい。

地域ごとの情報を良く知つていろんな計画なり事業に反映させる事をこれからやつていきたいと思います。特に震災に関して思つたことは、なかなか決まりごとやマニュアル通りにはいかないことが沢山ある…ということで、自らの判断でやれる事をやる事が先ず重要だということ。また、あらかじめ持つてある防災の知識が震災に役だつということを感じました。

なかなか支援者だけではやれないのは重々承知しています。日頃からの防災意識が重要なのだと思います。防災課と一緒に防災に関する知識などは災害時要援護者対策事の支援者や要援護者に伝えたいと思つています。

ななかか支援者だけではやれないのは重々承知しています。日頃からの防災意識が重要なのだと思います。防災課と一緒に防災に関する知識などは災害時要援護者対策事の支援者や要援護者に伝えたいと思つています。



市民協働推進課長

森安 東光さん

市

民協働推進課長の森安でございます。

市民レポーターの方々が、お三方ともコミセン関係者の方でした。私の部署ではいくつかの業務を担当しておりますが、私からも今日はコミセンのことに関してもお話をされればと思います。

コミセンでは、今回のような震災が起きた時にどういった対応をしていくかということについて、コミュニティ協議会と市との間で指定管理という協定を結んでいます。

その協定の中では震災・火事・事故が起きたときには、「必要な初動対応を行ってください」「館内の利用者を避難誘導してください」、「その後に市に連絡してください」という災害発生直後の約束事しか定めておりません。

そもそも、自発的に集まつた市民の団体であるコミュニティ協議会と、市民文化会館の管理運営を市民文化事業団が指定管理することとは若干性格の違うところがあると思います。最低限のところをお願いできれば、それ以上の事を求めることではないのかなと。私たちの側からは、自発的な取組みを行つていただければありがたいけれども、そこで事故があつても困つてしまふし、ジレンマというか、どこまでお願いして良いのだろうかという葛藤がある中で3月11日の大震災が発生したということです。

3月11日のことを思い出してみますと、当日は私の課では職員5人が徹夜して翌日の午前11時位まで残っていました。コミセンや市民文化会館などの施設に異常はないかという確認をし、また、帰宅困難者への対応として駅前の施設を開けるために職員が出かけていくといったことを行つていたのです。

その準備をしていたさなかに、南町コミセンから電話が入つて、学童クラブの子どもたちを保護者が引き取りに来られるまで預かるという事業をやっておられるのですが、「保護者が帰宅困難で迎えに来られないから、コミセンに泊めてもいいでしょうか」という相談と「井の頭通りをどんどん人が歩いているのだけど、エイド（休憩）ステーションとして開けてもいいでしょうか」という内容でした。

エイドステーションについてですが、正直申しまして、その時には公会堂を帰宅困難者対応で開放すると決めていましたので、できたらあまり想定外のことが起きないほうがいいなと思っておりました。

まだ余震が続いていた時間帯でもあつたので、コミュニティ協議会の皆さんも、そこに立ち寄られた市民の方々にとつても、何かあっては收拾がつかなくなるし確認ができなくなることもあるだろうという心配をしておりました。できるならば市の職員もいて連絡体制ができる公会堂の方で対応できればと思つていたのです。南町コミュニティ協議会の方と色々やり取りもありましたが、最終的には「しょうがないでしよう。お願ひします。ただ連絡だけは下さいね」と言つてその日の夜は更けていつたわけです。

もう一つ、公会堂に帰宅困難者の方々が何百人も集まりまして、

そこだけでは足りなくなり、急遽、本町コミセンを開けることになりました。その判断をしたのは夜中の11時過ぎくらいで、市の職員が行つても、セキュリティの解除から鍵の開け方まで、突然のことで分かりません。委員長さんがご近所にお住まいだということは存じていましたので、「深夜に申し訳ございません。開けるだけで結構ですので、お願ひできませんか」と電話をして鍵を開けていただき、そこへ職員が行つて帰宅困難者の受け入れ体制をとるという段取りをしました。結果的には本町コミセンの皆さんはそのまま2時頃まで残られて、色々お世話を歩いていただきました。その後一旦帰られて、またすぐ4時～5時に出て来られて、泊まられた方々にお茶を出す支度までしていただきたりしました。

先ほど申し上げたように、公の施設を管理してもらうに当たつて協定以上のことをお願いして事故が起きてはならないので、「突発的な事態や想定外のことをお願いするのは、かなり厳しいだろうな」と思っていたジレンマに対して、そこで一つ乗り越えられたというか、市民の皆さんを持つていらっしゃる「力」というものを、その時はすごく感じました。

それから、震災が起きた後のコミセンの運営についてです。計画停電とはいっても、まったく計画的でない停電がすぐ翌週から始まつて、結局は停まらないのか、停まるのかという不確実な状況の中で、「急に停電してエレベーターが止まつて、中に取り残されたりすると大変だから、計画停電中コミセンは閉めるという対応にしましよう」とお願いしました。それもひと段落した後は各協議会におまかせして、開館・閉館について決めていただいたという状況でした。

中には「東北の人が大変な状況なんだからコミセンを開けて電気を点けて趣味の会などをやつているということはもつてのほかだ」とおっしゃる方もいましたし、一方で「こういう時だからこそ、皆が地域でコミセンに集まって元気で良かったね、と確かめ合う場として使いたいんだ」という話もありました。そこで、「ぜひとも協議会の中で話し合いをして決めていただきたい」ということにしました。

確かに、「そんな風に言わないで役所で決めてよ」と言われた協議会もございましたし、夜7時頃に私が家に帰っていた時に携帯電話が鳴って、「今から緊急の運営委員会を開きますが、皆で1週間か2週間コミセンを閉めてしまうと決めてしまいそうなんです。ちょっと来て一緒に話してください」と言われて、急遽そのコミセンまでお話をしに行つたということもありました。

基本的には、各種の取組みについてはそれぞれのコミュニティ協議会で判断いただいて、市としては「こういったやり方ができるのではないか」という方法論について提示する。そういうふたつ対応をさせていただきました。

夏の15%節電も大変だったのですが、結果的には平均で40%位の節電を実現されました。

15%節電は達成しなくてはいけない数字だと思つていきましたので、これもどんなやり方があるのかいくつかの例を挙げて、協議会の皆さんの判断をお願いしました。

週に1回コミセンを閉めていただければ大体15%節電できるかなと思つていたのですが、データもなかつたので、設定温度も30度C位にして利用者の方から「気持ち悪くなつたので何とかしてください」と電話が入つたこともありました。

協議会の皆さんで様々なやり方について検討され、利用者にとつてコニセントがどうあるべきなのか、ということを考えながらやつていただけたのかなと思っています。

今回の事態を受けて、コミュニティ協議会側の動きについてご報告させていただきます。

コミュニティ研究連絡会、16の協議会の連絡会でコニ研連と呼んでいます。コニ研連が、初めてのことだと思いますが、年間テーマを、「防災と地域のコミュニティ」と決めて、これに関することを1年間やっていくことに決められました。そして、研修や活動についてはそれに関連したものをやっていくことになります。

例えば、10月11日にプレイスで各協議会の運営委員の研修会があり、60名ほど集まりました。「大震災から半年が過ぎて、防災と地域のコミュニティについて考えていきましょう」というテーマでした。「ワールドカフェ」という方法で、5名ずつ1グループになつて話し合つて、その中の1人が残つて、その他の人は別のグループに移つて、違うメンバーの人と先ほどまで話していたことについて、もう一度話し合うというやり方です。

「3月11日その時どう過ごしていましたか」、あるいは「東京で震災が起きたとすれば前と後にコニセントとしてどういうことができるでしょうか」ということを話し合い、それぞれのコニセントに持ち帰つて自分たちの課題としてもう一回考えてみましょう、という取組みです。

また、11月29日には、毎年行つているコニ研連の管外視察研修が実施されます。東京臨海広域防災公園へ80名位参加され、そこで防災の学習をして来られることになつています。

さらに、コニ研連にはコミュニティのあり方を考える懇談会部会があります。その年間テーマも防災です。震災当日にメンバーやそれが何をしていたか、受付の人はどんな状態だったかと何ができるのだろうか、ということを考えているところです。

それらを踏まえて、年度末にはコニ研連として大きなイベントを企画し、「地域の皆さんの期待に応えるにはどうしたら良いのだろうか」ということを考えていく場にしていくということです。市民はコニセントを使ってどんなことができるのか、コニセントの皆さんと施設設置側の市が共にどう考えていくのか。今年1年の課題、活動をそこに絞つていただいて、地域におけるつながりづくりの場としてコニセントを更に発展させるような形で進めていただきたいし、それができるための行政側の基盤整備やバックアップを行つていけるように話し合つていきたいと思つております。

二巡目

■ 境南コミニセン自主防災 渋谷祐一さん

先ほど言い忘れましたが境南コミニセンはもし災害があつたとき隣近所と自分の家が安全だつたらとにかくコミニセンに集まつて会議を開こうと言う事です。

それから私は四つの団体の自主防災をしていますが、責任者ですのでどれを優先するのか今迷っています。一番古いのは平成7年に境南4丁目にできた防災組織ですが、そこの防災をするのかコミニセンの防災をするのか、境南小の防災懇談会のことをするのか、自主防災のボランティアをするのかを本当に迷っています。

コミニセンは原則的には集まつて会を開こうと思っています。前会長は、コミニセンは避難所ではないので絶対に鍵は開けませんと、開けてもしそこで災害があつたら僕は責任がとれませんと。今までの会長さんは困っている人は助けるべきと、いろいろな会長さんで判断が違います。そのあたりが災害の時に難しいと思います。

今回も9名の方の家族が帰れなかつた学童の子ども達を泊めるのかと、毛布も用意してあるので泊めようとしたのですが、泊めた時に何かあつた場合にだれが責任をとるのかといろいろ侃々諤々をして小学校と相談しましたが、先生方は帰つてしまつたんですね。一応先生に連絡をして、小学校のPTAの役員をしている方が家に連れておいでと、そして食事をご馳走しようと、いざとな

ればみんなが知恵を出し合うといろいろな事が浮かんてくると思うんです。境南小学校にもコミニセンにも防災本部はありますから、小学生やコミニセンに行く前に隣近所で災害があつた場合どうするのかを話し合つておく必要がありますね。

今個人のお宅に7カ所「ここに防災工具がありますよ」というメッセージボードをつけています。もう少し増やそうと思いますが手を挙げる人が少ないです。勝手に家に入られるのは嫌だとかいわれます。

■ 大野田地域防災の会 寺島 茉美子さん

けやきコミニセンでもコミニセンで何が出来るのかを話し合っています。3月11日は、私はたまたま家にいました。搖れがひどかつたものですから犬を抱っこして机の下に隠れました。が一瞬不謹慎にも、私たちがやつてきたことがこれで役に立つと思つてしましました。後で申しわけなかつたと思い直しもいたしました。

3月11日の直後、役員の方と地域をパトロールしまして、屋根の瓦が破損されてたり、門柱が斜めになつてしたり、成蹊のブロック塀がひび割れていたりで、凄かつたんだなと思つたりしました。一番問題だつたのはガスの復帰で、1日ガスが使えなくて困つたと言つていた方がいました。そのことに気づいて通りで一軒一軒声をかけて頂いたと言う話もきました。また、障害のある方が職場から家に帰る途中だつたのですから、存在が確認で

きず困ったという話も聞きました。私たち「防災の会」として何とかできないかと、きめ細やかな対応が何とかできないものかと、今後のシステム作りも大切にならなければと思います。

3月11日を機に、大野田地域は四中と大野田小学校が二つあります。今は大野田小学校に掛かりきりですが、四中にもぜひ立ち上げなくてはと思います。

これからは人をつなぎながら地域の皆さんに仲良くなることを私たちはお手伝いしたいと思っています。また、防災のリーダーを沢山育てたいと思っています。特に小中学生に関しては未来のリーダーとして育てていくことも私たちの役割かと思っています。これからもコミセンと防災の会が親密になってくると思いますので組織が手をつないでうまくいけばいいかと思う今日この頃です。

桜堤 コミセン

桜野 章嘉さん

全 体を聞きましていろいろな取り組みや行動もされていることを聞いて、どうしたものかと思うのですが、これは比較するものではなくて地域ごとの特性もあることからできるところやしていくと先ほど森安さんが言わされたように、無理のない形でやれたらなあと思っています。

大野田はけやきさんと緑町さんとを巻き込んでちょっと大きな組織で大勢を巻き込んでやつていかれるときも聞きましたけれど、先ほど西川課長が言わされたように、組織は小さくする方が密度を高

められるのではないかと、個人情報の面も含めて呼び掛けの密度が高くなっていく。「あの方大丈夫かしら」というような気配りができるような事が大事なのかと我々は思っております。

桜堤地域社協さんは広い距離をお持ちですけれど、とりあえず桜堤コミセンは手の届く範囲と言う事で桜堤2丁目3丁目と言う形である程度限定した方がいいんじゃないかということでとりあえず始めております。桜堤1丁目や境5丁目あたりに関しては西部コミセンさんのテリトリリーでもありますので、我々は密度を高めることを重点に組織を小さくすることを目指して始めました。

避難所の話ですけれど避難所とするためにはそれだけの人的な資源が要求されます。そういうことはコミセン全体を含めますのも無理かと思っているところですが、時間限定であれば体力の続く限り、一時待避所とか一時救護所というような形で開設することはできるだろう、その後は公的な機関に移行してもらえばと思い、対象をそのあたりにしぼっていきたいと思っています。

先ほどの安否確認の話の後で、否の時はどうしようかと我々の方も考えているんですけど、人を担いでどこかに運ぶことはすごく体力のいることで、段々年をとつてきますと、人一人を運ぶと言ふことは5mから10mがせいぜいで50～100mになるととても体力が続かないし、それが多くの方でしたらとても無理だと思つております。あるコミセンさんや地域では折りたたみのアルミ製のリヤカーを準備されていて、少人数で大勢いを運ぶことができるという体制をとられていると聞いております。そういうものがコミセンとしても備えてなくてはいけないと考えております。

夜間のエンジンを使う発電気については、3カ月に1回使わないといふ水が溜まつて動かなくなってしまうということで、始動させ

るのも技術がいるというお話しを伺つております。ちょっと時代は変わつていて、ガソリン（大量に持つことは危険）の代わりにカセットコンロを使って発電する発電機が市販されているそうです。家庭のガスボンベと同じものですので取り扱いも楽ですし、保管することも可能だとの観点から、これからは装備の見直しも必要になつてくるのかと思つております。

桜堤としましてはなるべく地域の人たちが安心安全でいられるよう普段から顔の見える会合、顔の見える運営を築いています。今後とも防災に向ても、基本は人と人とのつながりということでお対処していきたいと思っております。

■ 防災課長 西川 和延さん

私はからは、自助の部分で皆さん自身が身の安全をはかることがあります。

3・11東日本大震災では津波の被害が多く出ましたが、私どもは実際には、阪神・淡路大震災の時の被害状況が、この武蔵野市など都市部には一番参考になると思つています。

あの神戸の地震は、時間も午前5時46分で皆さんが寝ている時間帯だったこともあるが、亡くなられた方の9割が自宅で、なつかつ地震発生15分以内に亡くなっていたことが、その後の監察医の診断等でわかつています。そうしたことからも、避難所より前に、身の安全を図ることが一番大事だと考えています。そのために、先日も家具転倒防止器具の配布を行い、今日もそのリーフレ

ットをお配りしました。

昨夜、震度2の地震があつたのをご存知だと思いますが、その時、私もそうですが「あつ、揺れだしたな。このまま大きくなるのかな」と動いてないですね。何となく、変な期待をしながら待つてあるという状況が、何秒かあると思います。直下型の場合はその余裕がないが、遠くの地震だと小さな揺れが最初に来るので、その間に例えれば集合住宅だと、出入り口が1か所しかないのをそこへ動く、あるいはタンスなどの転倒の可能性がない所に自分の身を移すということまで、その数秒でできると言われています。

特に、大きな地震が来たら「凍りつき症候群」といつて動けなくなつてしまふそうです。それは、人間として当たり前なのですが、しかし訓練・経験・知識で、昨夜くらいの地震の時にまず行動して、小さい地震の時に訓練して体になじませることが大事です。ぜひ、待たずに行動することを身につけていただき、そのまま何もなければ訓練を終了して、テレビ等で震源や震度を確認してほしいと思います。

武蔵野市の震度の表示について、緑町というのは市役所の震度計、八幡宮前というのは五日市街道の八幡様の隣にある消防署の吉祥寺出張所の震度計で、どちらか大きい方の震度が武蔵野市の震度として発表されます。

地震が起きた時の初動の動きを、自分の経験等でコントロールして身の安全を図つて頂き、大きい地震であればその後の対応につなげてほしいと思います。

生活福祉課長

鎌田 浩康さん

火 害時要援護者対策事業について説明します。こちらは平成19年度からはじめました。きっかけは、一つには民児童委員災害時一人も見逃さない運動が19年3月にはじまりました。武藏野市の民生委員さんもこの活動に取り組むということになつたこと。もう一つは、国から「災害時要援護者対策」の要請があり、避難支援ガイドラインが平成18年3月に出来、武藏野市でも取り組んでいくということで、18年11月に庁内の関係機関に検討会議を設置して事業の枠組みを決め、データの集め方などの検討を始めました。

19年10月に東部福祉の会と吉祥寺西福祉の会がモデル事業を開始して、その後順次実施地区が増えていきました。平成23年度に3地区が始まつたところで、市内全地域でこの事業に取り組んで頂くことになりました。

協力団体は地域社協、市民社協、民生児童委員協議会です。対象者は要介護認定1～3の独居高齢者の方。要介護4・5の方は

在宅であれば対象に入っています。障がい者の方は自動的に入れるというのではなく、登録したいという本人の意思の確認を、手挙げ方式で、申し出があれば登録となります。身体障害者手帳、愛の手帳などをお持ちの方が対象だが、まだ障害というだけの枠で登録している人は少ない。

高齢者で障害者手帳を持っている方は、高齢者の枠で人数にくまっています。65歳前で障害者手帳だけの人数は少ない状況です。

最初は、避難誘導までを考えていたのですが、地域で取り組んで頂く中で、どうやって運ぶかというのがありました。まずは、日頃の見守りをひとつ的目的においていましたので、安否確認までの体制を作つていただくことで進めました。避難誘導については出来る範囲でということで。どうやれば良いのかは、その時その時、ケースバイケースでいろんな状況があるので、どういった対応が必要かとなると、なかなか支援者だけではいかないのは重々承知しています。それを色々な資源を使って体制としてはこうしましようとしても、行つてみたらこういう状況だと言われてしまふと、それは近くにいる人で対応するしかないのかなと思つています。その辺が今後の課題です。

避難所に行つても、一般的な避難所ではなかなか対応出来ない方は、福祉避難所を指定しているので、福祉避難所に行つていただく。それでも避難所でどうするか、避難所の運営組織が出来てきて、話し合いができるべきよいのではないかと思います。全体をお示しすることはなかなか難しいのですが、そういう事を行つ一つ積み上げていきたいと思つています。

市民協働推進課長

森安 東光さん

ミセンには何を求められているのだろうか」ということですが、そもそもミセンの役割ということが一番問われているのかなと思います。

アンケートをとれば、コニセニをご存知ない方の比率も高いん

ですね。ご存知の方は何度も使つていただいて「便利だ」とか、「いい所よね」とおしゃつていただけるのですが、ご存知ない方にとっては「コミセンが何なのか」、「そういつた場所があるとうことも知らない」そういうことも各コミュニティ協議会の皆さんで認識いただいて…。私たち行政側の役割というのは、コミセンのPRとか武藏野市のコミュニティについて市民や新しく入つて来られた市民の皆さんに紹介することにあると思います。それはまんべんなく広く浅く伝えることですので、生き生きとしたものが伝わるものではないと思っています。

それぞれのコミュニティ協議会の活動が、人を引き付ける力があるものになるように常に意識して活動していくたく、そして「コミセンに行けば地域の色んな情報が入ってくるんだ」ということが地域の皆さんに認知される場になつていくことが、あらためて問われているのだろうなと思います。

また、3・11があつてから、地域のつながりに対する市民の皆さんのが大きく強くなつているということが各種の調査結果にも出てきています。言つてみれば今はチャンスなんだろうなと思つています。もう一度コミセンから外に出て行つて、外部に向かつて開いていくことが求められていると強く感じています。

質疑応答

会場からの質問・意見に担当者が答えました。

質問

今震度6以上の地震が起きた。そういうときに皆さん方は1番最初に何をしてその次何をするかつていうことをお伺いしたい。行政の方は行政の立場があるでしょうし、コミセン関係なんかの方もその立場があるでしょうし、それの方に教えていただきたい。ちなみに私はまず何とか家に一刻も早く帰つて、今デイケアサービスに通つている老妻の安否確認をやつて、それから近隣の方々の安否確認をやつて、それから皆さんに呼びかけて助けなくてはならない方々のいろいろな手配をしようかなと思っています。

(渋谷さん)

●先ほど西川課長がおつしやつたように、グラグラつと来たら大きくなるのを待つんじやなくてとにかく玄関の扉を開ける。マシンションみたいなところは一箇所で、出られなくなるんで、訓練をやつてる方は知つてゐると思いますが、イスとか何かを置いていつでも逃げられるように、出来たら下に行ける階段のところに行く、そういうことですね。昔よく「火を消せ、何を消せ」って言つたんですが、今はもう火は収まつてからでいいんです。天井まで火がいたらもう素人じやどうにもなりません。とにかく玄関に行って閉まらないように何か支え物をする。それで周りの様子を見て隣近所に声をかける、隣はドアを開けてない

かもしれない。それで大きな声で「火事だ！」って言うんです。すると「何だ」って言うんでみんな集まつてくるんですよ。よく言われるのはね、犯罪者が入ってきたときも「泥棒だ！」って言うとみんな怖くて来ませんから、「火事だ！」って大きな声を出すとみんなびっくりして出て来ます。とにかく大きな声を出すことです。そして隣の様子を見て、人は外にている房は親父の介護のために九州の方に行っていました。向こうから連絡しようと思つたけれども全然連絡が取れないという状況の中ですごく心配したそうです。東京にいたら心配したのでしょうかが、こつちは全然心配してなかつたというのが実情ですね。

するとか、そういう順序をいつも頭の中に入れておけばいいと思ひます。とにかく大きな声を出して「火事だ！」って怒鳴れば集まつてくれるのです。なかなかそこまで訓練していないと出来ません。そういう指導を僕ら防災ボランティアはやつています。とにかく大きな声を出して「火事だ！」って言ひます。とにかく大きな声を出すとみんなびっくりして出て来ます。とにかく大きな声を出すことです。そして隣の様子を見て、人は外にている房は親父の介護のために九州の方に行っていました。向こうから連絡しようと思つたけれども全然連絡が取れないという状況の中ですごく心配したそうです。東京にいたら心配したのでしょうかが、こつちは全然心配してなかつたというのが実情ですね。

向こうは大丈夫だつたなつて思つていましたから、向こうが心配しているつてことを思ひ浮かばなかつたんですけども。先ほど言いましたように安否確認のときの「安心だよ」、「大丈夫だよ」っていう連絡はやはり市の方にすぐにあげてください。連絡がないところが危ないところですつていうふうに言われています。ですから大丈夫だから連絡しなかつたじゃなくて、大丈夫だつたらまず連絡しましようつていうことで、まずコニセソに行つて大丈夫かどうか、大丈夫なら協働推進課に、電話が通じなければ防災無線で大丈夫ですつて連絡をあげることがまず二番目かなつて思つています。

●今ですと、まず自分の身を守るのが最初ですけど、次に戸を開けなさいということはお袋からの遺言です。お袋は関東大震災を経験していてそのときに家の戸が閉まらなくなつたとか開かなくなつたという例を多く知つてるので、まず戸を開けなさいということを小学校のときくらいから言われています。だから渋谷さんが言われたことがうちのお袋と同じ、大正解かなつて思つています。

分の立場としては一番目にはコニセソに行くかなと。女房のことはどうするかなというのは三番目になつてゐるんですけども。まあ大人ですから自分は自分でそれなりの対処をしているだろうと思いました。

●今ですと、まず自分の身を守るのが最初ですけど、次に戸を開けなさいということはお袋からの遺言です。お袋は関東大震災を経験していてそのときに家の戸が閉まらなくなつたとか開かなくなつたという例を多く知つてるので、まず戸を開けなさいということを小学校のときくらいから言われています。だから渋谷さんが言われたことがうちのお袋と同じ、大正解かなつて思つています。

次に自分としてはすぐにたぶんコニセソに駆けつけると思ひます。一人体制ですので昼間は女性が一人という状態ですのでやはり、利用者も含めて困難な状況もあるかもしれません。自

(笛野さん)

●私も笛野さんと同じようにすぐコニセソに駆けつけると思ひますけど、いまコニセソの方でもそういうときどうしようかといふことで話しあっています。防災担当がおりますので一応きちんとマニュアルを作つてほしいということは伝えてあります。まずコニセソの場合は自分の身を守るつてことをやつていただ

いて、来館者の方に放送できちんと机の下に入つてくださいといふこともやらなければいけないかと思つています。その次に情報をしつかり聞いて皆さんに伝えることが大事ではないかと思つています。

また家でもやはり扉を開けることと、自分の身を守ること、火の始末をすることなどが基本かと思います。また、必ず三日分の飲み物と食べ物は用意しておいてくださいということは言つていますし、それぞれ家族中で避難経路やなんかもきちんと話し合つてくださいねということは防災の会のいろんな活動の中で伝えていこうかなと思つています。

(渋谷さん)

●言い忘れましたけど、安否確認は境南小学校に問い合わせて紙を貼り出してもらうんですね。そうするともし連絡つて言ったらその紙を見て、この人はどこにいるつていうふうに訓練をやつてます。境南小学校に連絡して、行つてもいいんですけど、自分で貼るなり、ここにいますとか、どこから誰から連絡ありましたって貼り紙して、そうすると境南小学校でその関係者がそれを見て、この人は自宅にいるとか小学校にいるとか、そういう訓練をしています。

(西川課長)

●ここで今震度6があつたらつてことなんですけど、私の立場は若干他の職員と違うかと思うんですけども、まず第1番目は身の安全ですから、この場での身の安全を皆さんと確保する。震度6を超えるとおそらく、ここにある机とかイスがかなり動

いてしまいます。それに挟まれることもありますので、この場で皆さんの安全確保、あるいは怪我をしてしまうこともありますので、それをいち早く確認したうえで、この場所のことは怪我をしていない安全な方に委ねて、私は大きな地震があれば市内全域の状況を把握しなければならない立場なので、5階にある防災安全センターのほうに戻らせていただくようになるとになろうと思っています。

また隣にいる職員、両課長もですね、所管の施設とか所管をしている団体等の安否といいますか、状況確認をしなくてはいけない。さつき篠野さんからコミセンのときは市民協働推進課の方に上げるというふうにとにかく上げると。その集約をそれは各課がすることになりますので、防災課としましては全体の報告を受けると同時に市内全域の被災状況をいち早く確認し、震度6を超えていれば各避難所20箇所全部開けなければならぬと思いますので、その準備をし、災害対策本部の立ち上げだとかに奔走するようなことにならうかと思います。的確な情報ができるだけ早く防災行政無線等を使い市民の皆さんにお伝えし、特に怖いのは火災ですので、火災がどこかで発生するようになれば、その状況については特にその地区の防災行政無線に放送をかけて、避難の方向だとかそういうところの状況を提供することになるのかなって思います。

(鎌田課長)

●ここで起きたらこここの安全を確保する。皆さんの安全を確保したこととを確認したうえでそれぞれの持ち場に行くことになると思います。私は福祉の方の対策部になりますので、その生活

福祉課庶務班って言われています。要援護者対策については高

齢部門と障害部門などが入っているんですけども、医療班は健康課が入っているんでそれぞれの班が、対策本部ができれば設

置されますので、そこ指示に従っていくというような形になるかと思います。で、要援護者の方の安否確認の情報なども入ってくるということになるかなと思うので、防災センターの方に職員も配置するようになるかなと思います。

(森安課長)

●私は皆さんのこととは西川課長に任せて現場に戻ります(笑い)。コミセンは分館も含めて20あります。それから文化施設が8館ありますので、その状況の確認ということにならうかなと思っています。

実際3月11日の日にも地震があった後に職員を現地に行かせ

たんですけども、夕方になつて道路が混んできて、車では動けなくなつたということが教訓としてありました。職員に現地を確認させるということと、連絡を各館から上げてもうとということを、うまく組み合わせながら集約するということが、まず

最初の仕事なのかなと思っています。

(質問)

渋谷さんはなるべく早く会議を開くとおっしゃっています。日常的に何か災害があつたときにはコミセンの運営委員の方々は集まることになっているんでしょうか。それとも召集しないと集まらないのでしょうか。

(渋谷さん)

●自宅が安全なら駆けつけるということになっています。

(寺島さん)

●けやきコミセンの場合もとりあえず何か起きたら代表委員が5人いますので駆けつけて対策を練ろうという話はきちんとしています。

(笹野さん)

●桜堤コミセンでは役員が6人いるんですけども何も取り決めがなくともいつもすぐに集まるという状況であります。



質問 先ほど笹野さんが家庭用のテーブルコンロのガスボンベを使って発電ができるつておっしゃつたんですけど、その商品名とどうすれば買えるということを皆さんに教えていただきたいと思います。

(西川課長)

●自動車メーカーのホンダが出します「エネポ」という発電機で、10万円位です。

販売している場所もかなりあると思いますが、私は境のイトヨーカ堂さんで見ました。イトヨーカ堂さんでも防災のグッズを揃えていただいているので、お店の方に聞いていただければ、あるのかなと思います。ご自宅で鍋などに使うカセツ

トコンロのボンベを燃料として発電ができるというものなので、ガソリンみたいにダラダラと垂れたり、使いっぱなし大で、キャラブレターが詰まつて、その後エンジンが掛けづらくなつてしまふんですけれども、ガスの場合それらがないので、比較的家庭でも手軽にきれいに使えるのかなと思います。ただ、ガスなので排気が出ますので、閉め切つた屋内で使うのはダメですと書いてあるかと思いますが、そういう商品ですので機会があつたらご覧いただき、お金に余裕があればぜひ購入していただくということかと思います。



質問
寺島さんと西川さんにお伺いしたいのですが、小中学生を未来のリーダーとして育てたいという方向を示しておられましたが、どういうふうなことをお考えかということと、西川さんは「近助」という近くを助けるという、スピリットとしておつしやつたのか、石原都知事がおつしやつているような「防災隣組」の意味とは違うようなイメージを持つていらっしやるのか、その辺りをお聞かせいただければと思います。

(寺島さん)

● この度の震災でも中学生、高校生が大活躍している姿を見ました。が、やはり日中に何か起きたときに地域にいる中学生、高校生に協力していただくのは本当に必要だろうということを考えています。四中の生徒会の方にも、ぜひ防災に対してもお手伝いというカリーダーとして育つてほしいとお話し合いを持ちたい

と申し入れはしております。今回初めての避難訓練でしたので、なかなか中学生・高校生にまで手が回りませんでしたけども次回から中学生・高校生にも参加していただいて少しづつ地域のために何かやつていただく方法を取つていきたいなと思っています。

(西川課長)

● 「近助」なんですけれども、山村武彦先生の受け売りですので内容的に全部わかつているかというとそうでもないのですが、先ほどお話した「自助」と「共助」、「共助」もかなり範囲が曖昧ではあります。が、比較的大きい範囲だと思います。「近助」は「自助」と「共助」の間に入るものとして、隣近所という意味での「近助」はもつとクローズアップされていいのではないかなど思います。

特に、津波だとよくわかるのですけれども、避難するときに町会単位で一回公園に避難して、それからみんなが集まつたのを確認して高台に逃げるという二段階避難をとつて、いたところがあつたそなんですが、そこでは何人かがまだ来ないから「皆さん、公園で待つていてください。探して来ます、連れて来ます」と言つて探している間に津波が来てしまつたという事例があるそなんですね。これが「共助」の考え方の避難の方法だと思うんですけども、これだと間に合わない可能性がある。新聞等で「津波てんでんこ」ですか、三陸地方での言い伝えを紹介していましたが、誰かと一緒に逃げるのでなく、自分勝手でかまわないからとにかく逃げろと。津波が来るのが想定されるからすぐ逃げろという言い伝えなんですけれども、せ

つかく「共助」として、みんなで点呼を取つて確認して避難しようと言つていたところでは、被害にあつてしまつたということなんですね。そういうつた話も聞くと、「てんでんこ」はともかくとして、もうちょっと小さい単位で逃げられるような訓練といいますか、頭の切り替えが必要なかなと。

ここであれば、当然火災が一番避難しなければならないことですけれども、その場合でも当てはまるのではないかと思つています。石原都知事がおつしやつている「防災隣組」という考え方と相通するものであり、聞くところによると、東京都から今月中に発表される予定の「防災対応指針」の中にも、今お話しした隣近所的な考え方に入るというふうに聞いております。



質問

先ほどNPOの方がおつしやられたのは現地の気温がものすごく下がるだろう。だから年内の災害支援ボランティアは無理だろうと話をしてましたので来年の計画はどうなのかお聞きしたい。それから、放置自転車はどう考えているのか。車椅子、盲人の方、救急のときの消防車に非常に弊害があると思つています。

(西川課長)

●専門ではないので、細かいところ、あるいは正確かどうかは若干割り引いて聞いていただければと思うのですが、放置自転車については、以前吉祥寺は全国一位だったのですが、その後自動車駐輪場を整備すると同時に放置自転車の撤去を継続的にや

つてきております。一定数の駐輪台数が整備できたことで、今は吉祥寺駅と三鷹駅周辺の歩道の一時駐輪場を止めております。駐輪台数が充足されているのにも関わらず、駐輪場に入れないということがありますので、路上に放置されている自転車については、毎週交通対策課の方でトラックを出し撤去しています。ただそれで全部なくなっているわけではなく、おつしやるようにしてしまった方がいる。それについては撤去と合わせて、マナーとかモラルの向上を訴えて違法駐輪を減らしていくことをしております。災害時はそういったものが障害になってしまいますので、防災安全部では安全対策課の方でパトロールをしておりますので、放置自転車の情報を入手したら交通対策課の方に連絡して撤去をしてもらうようにお願いしているところです。

(鎌田課長)

●どのようなボランティアの情報が欲しいのかによつて変わるのでですが、基本的には東京都にもありますし、全国にありますボランティアセンターからいろんな発信が出てくると思つております。そういうつた情報を市民社協を通じてお知らせが出来るようになさせていただきたいと思つてますが、そちらの方で今どういう考え方を持っているのか、どういう方向性を持つているのかということは私の方では情報を持つておりません。

第2回 市民学習会 感想

2011/11/4

●2回の学びで防災に対し、自分が何をしていけばいいのかが見えてきました。

地域でつながるためにまず、身近なお隣さんと親しくなりたいです。コミセンが市民の情報を集約し必要な人に届くしくみがいると思います。境南小の安否確認のようなしくみもいいなと思いました。

●3月11日(金)きっかけに防災のあり方が参考になりました。

●関連部署の職員3名が加わってのパネル討論の内容はそれなりに充実していた。コミセン関係者だけで取り組みを深める方法もあるが、今回は今回で意味がある。欲を言うといつもの通り参加者同士でしゃべり合う時間があるとよかったです。時間がねえ……？

●自助・共助・公助という言葉を最近良く耳にします。行政（公助）をあまり当てにするなども言われています。自らの命と財産は自分が守る、一番大事なことだと思いますが、一方行政にとって最も大切な任務であって、行政の仕事は極論すればこれにつきると思います。市民のつながりも絆も大切だとは思いますが、災害が起きる前に防ぐことが大切なのは？つまり武

藏野市で地震が起きて一番大きなことは家具や壊れた家屋の下敷きになつて死ぬこと。もう一つは壊れた家から火が出て燃え広がることではないでしょうか。災害発生後の訓練はあまり意味があるとは思えません。住民を説得しても耐震性のある住宅に変える必要があると思う。補助金が少なすぎる。耐震化工事のメニューが1つしかない→複数化

●市で防災計画が見直されているとのことです。が7つの中の一つに災害時要援護者事業についての様々な課題がどのように提示されるのか関心があります。地域でも話し合いの機会はあります。が、考え方は様々です。

●各自が努力することが大切なことだと思います。

●前回の学習会ではコミセンや個人で帰宅困難者や近隣の支援の話を聞き、近隣の人とのつながりを意識していました。今回、防災課西川課長のお話を聞いてハッと気づきました。自分が助けられなかつたら人助けもできませんね。弱い揺れのときにこれから強くなるかと様子をみてしまうので次からは出口や身の安全の確保を心がけたいです。

●コミセンのチラシでこの会があることを知った。初めて防災についての取り組みを地域・行政の考えがわかった。MIA（武藏野市国際交流協会）防災委員として各委員と外国人に説明していくたいと思う。

●市やコニセソ等地域団体からの情報をまだよく理解していなか

つたことを反省させられました。今日の学習会でたくさんの方
がいました。行政と地域の協働がよくすんでいることを
実感できました。

●市民側、行政側、両方からのお話が聞けてとてもよかつたと思
いました。いろいろな面から学べたと思います。企画が良かつ
た。

●防災活動、組織の根本はまず地域交流、お互いに関心のあるこ
とが必要だと思います。

●各レポーターのお話で充実した学習会でした。

行政と市民が同席してのレポートはかみ合せもよくとても
充実した。

「協働」としても前進したと思います。

「協働サロン」はもつと充実・拡張してもよいのではないかと
思います。

●子育てを始めてから地域のことを意識するようになりました

が、震災後特に地域のつながりの必要性を感じるようになりました。
少しずつでも地域のことに参加していきたいと思います。
今日は参考になるお話をありがとうございました。

●後半だけの参加でしたが良い話が聞けました。行政、地域、そ
れぞれでなく市民も含めて協働・協力・連携が必要だと改めて

感じました。ありがとうございました。

●初動の大切さとそれについての訓練をそれぞれやらなければな
らないと感じた。

カセットボンベの発電できる機器の情報・・初めて知つてよ
かつた。
市民の自主的な動きと力を知ることができよかつたと思う。
市民と行政が同じ場所で話し合える、学習し合えることができ
た。これからも大切に続けてほしい。

●2年前にフリーになつて時間的ゆとりもあり地域に対して何か
できることはないのか考えています。

常日頃の地域のコミュニケーションを第一に考え、そのメッ
セージの大きさをどの程度にすればいいのか。大きいと薄れる。
本日は大変参考になりました。

●初めて参加しました。地域でそれぞれの活動があることを初め
て知りました。私の地域の実情は全く知らないので今後に生か
していきたい。

●南町コニセソが帰宅困難者のために開けたとき舞台裏の話が興
味深かった。市民の思いと行政の立場の火花が散るようなせめ
ぎあいの中で決断があつたこと。そのかけには日常的な信頼関
係があつたからこそと痛感しました。率直な話が聞けてよかつ
た。

鎌田さんから「ひとりひとりの支援プランを作つていけない

か?」との提起があつたのは、キツイけれどもとても夢がある発言だと思った。

「今、地震が来たらどう動く?」という質問は行政のBCP（優先度をつけて業務を行う）の考え方とつながり、絶好の質問でしたね。

● 各コミセンの方のお話がありましたがそれぞれに地域の中でコミセンがどうあるべきか、真剣に考えていることがよくわかりました。災害時、一時避難所や一時救護所として開放していただとありがたい（地域の人たちから期待されているのでは）実際の災害時はマニュアル通りにはいかないがあらかじめ持っている防災意識が役に立つと思う。

市側も含め具体的な話が聞けて有意義だった。

● いろいろな方面からのお話を聞くことができて勉強になりました。もう少し突っ込んで聞きたいこともあり、時間の問題や個別のことになるのかなと思い聞くだけになりました。コミセンの活動をしている者としては、コミセンの役割をもつと自主で考える必要があると思いました。（市の方はジレンマがあつて提案できないことも多いようなので。各コミセンを横並びに把握するのではなくもつと一步踏み出して生の声を聞いてほしいと思っています。）今、放射能に対する不安が広がっていると思います。冷静に考えられるための知識と計測できる機械をコミセン単位に置いてはどうか。

平成23年度 武藏野市協働推進事業
協働推進のための市民学習会

大震災！その後の市民は… 地域の実践から学ぶ

発 行 日 2012年2月1日

発 行 武藏野市企画政策室市民協働推進課
〒180-8777

武藏野市緑町2-2-28 武藏野市役所西棟7階
電話 0422-60-1830

E-mail sec-kyoudou@city.musashino.lg.jp

編集・制作 武藏野市NPO・市民活動ネットワーク・
「協働推進のための市民学習会」実行委員会